

第13回

西ヨーロッパ世界の成立

監修・講師
大月康弘

学習のねらい

476年に西ローマ帝国が滅亡すると、中世の西ヨーロッパ世界ではフランク王国が政治の中心となった(8世紀)。この王国は西ヨーロッパのほぼ全体を治め、この王国のもとで、現在のドイツ、フランス、イタリアの基礎がつけられた。他方、宗教面ではローマ教皇を中心として、キリスト教の信仰が人々のよりどころとなった。11世紀、このフランク王国の王と、ローマ教皇との間で権力闘争が起こる。叙任権闘争である。その中で、「カノッサの屈辱」と呼ばれる事件が起き、西ヨーロッパ世界を大きく動かすことになる。

・ <西ローマ帝国の滅亡>

フン人 ゲルマン人の大移動 476年 オドアケル

・ <フランク王国の誕生> クローヴィス ランドバルド王国 ピピンの寄進

カール大帝 オットー1世 神聖ローマ帝国 キリスト教 アーヘン

・ <皇帝と教皇による叙任権闘争>

カノッサの屈辱 グレゴリウス7世 ハインリヒ4世

■ ■ ■ 西ローマ帝国の滅亡 ■ ■ ■

中世の西ヨーロッパ世界には、2世紀以来、**ゲルマン**諸部族が侵入し、ローマ帝国と交渉をもっていた。**476年**に西ローマ帝国が滅亡すると、東ゴート、西ゴート、ブルグント、ヴァンダル、フランクといったゲルマン人たちは、それぞれの地域で半独立的な諸王国を成立させていった。6世紀、ビザンツ皇帝ユスティニアヌスが、イタリア半島を再征服して、古代ローマ帝国の版図を一時回復した。しかし、その後イタリアにランゴバルド王国が成立するなど、政治的混乱は続いた。7世紀になると、フランク王国が勢力を伸ばし、政治の中心となった。この王国のもとで、現在のドイツ、フランス、イタリアの基礎が形作られた。8世紀後半、ローマ教皇は、フランク王**カール**と連携して、彼を800年にローマ皇帝にした。これによって、西ヨーロッパ世界は、ローマ教皇とフランク王の政治連携のもとに展開するようになった。

■ フランク王国の誕生 ■

西ヨーロッパ世界では、キリスト教の信仰が共通の文化だった。ゲルマン諸部族国家は、キリスト教の信仰を中心に人々を組織していた。その中心には、ローマ教会があった。ローマ主教(教皇)は、コンスタンティノープル教会と連携して信仰内容を管理、西ヨーロッパ内の諸教会を束ねていた。7～8世紀、ローマ教皇は、ランゴバルド族の攻撃に耐えかねて、それまでのビザンツ帝国に頼らず、フランク王に支援を要請した。フランク王ピピンがイタリア遠征して、ここにフランク王とローマ教皇の連携が成立した。ピピンの息子であるフランク王カールの皇帝戴冠(800年12月25日)は、その総決算だった。

■ 皇帝と教皇による叙任権闘争 ■

10世紀、ローマ教皇は、イタリアの政治に翻弄されて墮落していた。他方、王や貴族は、独自に聖職者を任命(叙任)して、教会を私物化していた。聖職者を任免する権利を手に入れるということは、教会の財産、つまり富を得るということだった。11世紀になると、改革派教皇が現れる。ローマ教皇グレゴリウス7世(在位1073～85年)は教会の腐敗を改めようと考え、神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世(在位1056～1106年)との間で叙任権をめぐる争いが起きる。グレゴリウスはハインリヒを「破門」し、対立が極まった(1077年)。「破門」は、臣下の離反を引き起こし、ハインリヒは、北イタリアのカノッサにいたグレゴリウスに、許しを請うた。これが「カノッサの屈辱」という事件である。これによって、ローマ教皇の政治的優位が高まり、西ヨーロッパ世界は「神権政治」体制となった。

考えてみよう 調べてみよう

- フランク王国の領土を歴史地図で確認してみよう。
- フランク王カールの宮殿があったアーヘンの場所を確認し、ローマとの距離を調べてみよう。
- 叙任権闘争が起こった11世紀のヨーロッパで起こった事件を調べてみよう。